

「変わりもの」の本

並木せつ子

「子どもの頃読んで印象に残っている本・好きな本は？」というアンケートをよく見かけるが、回答欄には大抵「岩波少年文庫」や「少国民文庫」などの本流に行く本の名まえが挙がる。私にはそういうものが無いので、こういうアンケートを見るたびに、引け目を感じてきたものである。ただ本を読むのが好きで、たとえ心からおもしろいと思える本でなくても、くり返し読むという子ども時代だった。

そんな私の記憶に残っている本を挙げてみたい。好きな本というわけではなく、お薦めするものでもない。お薦めでもない本をなぜわざわざ紹介するのかというと、最近、1970年頃の『図書』を見ることがあって、それに幼少年期に読んだ本についてのアンケートが載っていた。中野重治や貝塚茂樹など当時の著名人が、いろいろな書名を挙げる中で、鶴見俊輔が『団子串助漫遊記』と答えているのを見たからである。たまには「変わりもの」の本もいいものだ。

『オルコットの花物語』は、オルコットが晩年に花の名をおりこんで書いた少女小説の短編集で、これ一度きりだったが父が仕事帰りに買ってきてくれた本である。とりあげられた植物があまり馴染みのない「つた」「しだ」「月桂樹」などで、そこに何とは知れず西洋を感じたものだった。

『紅雀』は、吉屋信子の少女小説の中の一冊で、両親を亡くした少女が知り合いのお金持ちにひきとられて……という話。本屋さんで買う本がなかなか決められなかったとき(何しろ滅多に買ってもらえないので)、一緒に行った母に「これにしたら」と言われて決断した本なのである。

この2冊もそうだが、少女小説の主人公は

貧しかったり、親がいなかったり、病弱だったり。脇役のお金持ちの子は意地悪か(後に改心する)良い人ならば慈善的。そして最後は「めでたし」というパターンが多かった。

『緑の館』(ハドスン著)は、密林に迷いこんだ青年が妖精のような少女と出会い恋に落ちるが、少女は悪い人(?)たちに焼き殺されてしまうという話。衝撃的な結末に二度と読みたくないと思ったのだが、図書館で働くようになってから、『夢を追う子』の著者が書いた本だと知って驚いたこともあり、二重に忘れられない本となった。

『日向が丘の少女』(ビョルンソン著)は、小学校の図書室で借りた本である。日当たりのよい丘に住む少女と日陰に住む青年の恋物語(?)のようなものだったと思う。いつも開室されるわけではない物置のような図書室で選んだことと、「日向」は「ひなた」と読むのだと知ったことが印象深かった。

『地球最後の日』(ドイル著)は、地球全体が毒ガスのような雲(?)に覆われるという話。酸素の部屋を用意して生きようと試みる人々が主人公だった。大人になってからも、どんより曇った日にはこの毒ガス雲を思い出したものである。ところが、後年、図書館にあった『地球最後の日』を懐かしく思って手に取ったら、なんと地球に惑星がぶつかる話に変わっているではないか。よくよく調べると、こちらは作者がワイリーで、毒ガスの話とは別の作品だった。そんなこともあって記憶に残っている本である。

以上が、なぜかよく思い出す書名である。おもしろかったという記憶より二次的なことで印象に残っているのかもしれない。「変わりもの」の本だけど、読むことに夢中になれる時間をくれたのはまちがいないので、どの本にも感謝している。ちなみに『団子串助漫遊記』(大日本雄弁会講談社1925年)は宮尾しげをの漫画で、鶴見俊輔はこれを「数百遍」も通読したという。(なみきせつこ)

スポーツだけじゃない『スポーツするえほん』

五味 遊由

オリンピックの延期が決まり、選抜高校野球が中止となり、学校のクラブ活動や部活動も出来ない…と、世の中は今、これもだめ、それもなし、と否定せざるを得ない状況です。公園も、お天気の良い日は親子連れで賑わってしまうからと、遊具を使用禁止にした自治体も増えてきています。学校や幼稚園などがお休みとなり、子どもたちの居場所・遊び場がなくなっていることを危惧する声も高まっていますが、この本の著者、中川素子さんは、今のこの状況をどんなふうにも思われているのでしょうか。

「絵本はアート」という視点でユニークな研究をされている中川さんが、スポーツを描いた絵本を紹介する『スポーツするえほん』（岩波書店）を出されたのは、2019年初め。今年の夏に東京オリンピックが開催されることを、意識しての刊行であったと思いますが、本書のまえがきにも「私はこの本を、“がんばって”という言葉や“努力”という言葉などで埋め尽くしたくはないと考えた」、「絵本のなかのスポーツは、楽しく元気な真のスポーツの心を見せてくれることだろう」とあるように、自由で楽しいスポーツそのものの世界に迫った本です。

さまざまな「スポーツするえほん」

目次を見ると、「体を動かす楽しさ」、「動きの美しさ」、「運動会からオリンピックまで」、「コミュニケーションが生まれる」、「伝統の力」…と、スポーツをさまざまな面から捉えて、その特性をテーマに掲げていることがわかります。



『スポーツするえほん』中川素子 著/A5判/並製/160ページ/定価本体1800円/2019年1月刊/岩波書店

例えば、「体を動かす楽しさ」の章では、『はしるのだいすき』（わかやましずこ 作/福音館書店）や『できるかな？ あたまからつまさきまで』（エリック・カール 作/くどうなおこ 訳/偕成社）など、体を動かす楽しさや喜びを表現した本を紹介し、絵本の中の動物や人物たちが

どんなふう描かれ、どんな動きをしているか、詳しく教えてください。

また、「運動会からオリンピックまで」では、『むしたちのうんどうかい』（得田之久 文/久住卓也 絵/童心社）の、生き生きとその虫らしい生態を生かした活躍ぶりから、『ネコリンピック』（ますだみり 作/ひらさわいっぺい 絵/ミシマ社）の「よいどんで 走らなくて いいんだっ

てにゃ〜」とスポーツのルールはないのと同じで、すべてが許されている、ゆる〜いネコリンピック（唯一禁止されているのが「ひっかく」ことだそう）まで、幅広い絵本表現を見せてくれます。

絵本の表現の多様性、スポーツの多様性

さらに、絵本研究家の中川さんならではの、その絵本の絵画表現、技法や色彩、絵の構成などについても、さらりと教えてくれる点です。『ボヨンボヨンだいのうのおはなし』（ヘルメ・ハイネ 作/ふしみみさを 訳/朔北社）のさまざまな素材で対象を効果的に表現したコラージュ技法や、『スウィング！』（ルーファス・パトラー・セダー 作/たにゆき 訳/大日本絵画）の、スポーツの「動き」を表現しているスキャニメーションの手法。

絵本の表現は、実に多様で自由だなあと、ワクワクします。

また、絵本に描かれるスポーツについての豆知識も豊富です。プロバスケットボールの田臥勇太やマグジー・ボーズ、マラソンの高橋尚子、アドベンチャーレーサーの田中陽希など、アスリートの名前やエピソードはもちろん、「国際水泳連盟は2014年11月の臨時総会で、シンクロナイズドスイミング『男女ミックスデュエット』を新種目として導入することを決めた」とか、「スポーツ根性もの、いわゆるスポ根漫画やスポ根テレビアニメが目立って増えたのは、1964年の東京オリンピックの後、1966年くらいからであろうか」など、へえ~と思うようなことが満載なのです。この本を1冊読んだだけで、スポーツについてもいろいろ詳しくなったような気がします。

あたたかくゆるやかな視点

そして、とりわけ印象深いのは、筆者の手柄が伝わってくる文章です。「子どもたちは、走るのが大好き。公園などで、1~3歳くらいの子が走っているのを見かけると、私は“走るの上手だねえ”と声をかける。すると子どもたちは、“見てて”とばかりつたない走りを速め、そばを駆けぬけていく。付き添っている大人が嬉しそうに会釈する。走ることは、子どもたちにとって、〈大いなるよろこび〉と〈誇り〉なのだ」。また、「いつからだろう、通りに子どもがいると天然記念物のように思ってしまうほど、姿を見かけなくなった。交通事故や犯罪の多さなどのせいだろうが、こんな状態は異常にも思える。子どもを遊びや運動にさそう、ばばあちゃんのような大人が増えるといいけど……私はどうかって？ 昭和生まれの76歳。無理、無理、無理」。など
＜注：ばばあちゃんは、『そりあそび』（さとうわきこ 作・絵／福音館）の主人公。いつも元気で潑刺＞。現代の子どもをとりまく環境について、するどい批判も含みつつも、子どもたちに向

けるまなざしはとても優しく、あたたかです。

ちなみに、この本のタイトルロゴやイラストを手掛けているのは、中川さんの息子さん、中川淳氏です。表紙のタイトルは、各種スポーツで使う道具、「ス」は野球のグローブ・ボール・バット・シューズの一式、「ポ」はスキューバダイビングのフィン（足ひれ）・シュノーケル・タンクとゲージの一式を組み合わせて文字を作っていて、楽しいものです。「スポーツの道具」というのも面白いテーマになりそうですね。

スポーツはもちろん、ほかのテーマでも

巻末の「スポーツするえほん 種類別リスト」は、本文中で紹介していない本も加え、充実したブックリストとなっています。図書館でのブックトークや企画コーナー作りなどに役立つのではと思います。

愛知県豊田市の、地元高校の体育教師や大学講師が中心となって設立した「体育とスポーツの図書館」では、このリストのおよそ150冊を、可能な限り蔵書として揃えたいと、クラウドファンディングのプロジェクトを立ち上げ、この3月に達成できたそうです。開館10周年だそうです。本書がきっかけで、今まで十分でなかったという子ども向けの蔵書を増やせたとは喜ばしいですね。

絵本ガイドブックは数多ありますが、「スポーツ」を切り口にした本は、今までなかったのではないのでしょうか。しかも、この本は「スポーツ」をゆるやかに捉えて、中川さんの言葉をそのまま借りれば、「体を動かす楽しさや喜びを表現した絵本」から、「伝統的なスポーツを見つめた絵本」、「戦争や震災など、厳しい時代の中でのスポーツを描いた絵本」など、さまざまな角度から絵本を紹介しています。絵本の世界は、こんなに豊かでカラフルで、表現方法も多様なのだなあと、改めて魅了されました。スポーツではない視点から本を探りたい時などにも、頼りに出来る1冊です。
(ごみゆう)